中村俊定文庫
文庫 18
51

宮内省図書寮

中村俊定文庫

万句第一

賦何壺誹諧連歌

立圃

梅の香や神垣ゐる沢下馬の札

ほの白連もかすむ松乃夕木 昌久

元日の門ゐ玉宗より初めて 吉際

礼義乃化法あまねく 三

勝能乃紙行ゐ冥府まのがれん

ゆへあるぜるる主陽の

あんくみそむ

いとあごひ

うぐれるも
かるとおも
知りをもるむ[illegible]
[illegible]なきん入海
[illegible]
[illegible]道を習うけうすぐる
わちらちとゆるの[illegible]
逸物なれてもるにならわ
かるにの津よまのびいるに
矣又て月[illegible]
為よもろくと悪法もる人
[illegible]ねる形ならぐ小神
ゆとなもるの佛さうむ
逸世の[illegible]
[illegible]び深
[illegible]原

[illegible]の[illegible]びよ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
いざらゆんと法[illegible]教[illegible]な
あ[illegible]川物
毎日の鞠や秋よりふらむ
一夏の[illegible]
軍法乃道あさけきむ月
[illegible]
[illegible]
みるもとそ[illegible]
天井やひら
[illegible]

八月づき

ゆきもとめぬ秋

ゆきなれぬ月をとはしたがひすぐるを
うしらの月数よりこゝぬ梅のそ
引数ゆゑ海ぐあるとゆきの月
小雨よのゝぬまやせんハ何
せんつくんをすまし夜の月
おぐむとをなれ月の神お
いまはしーハいそ河原の夕涼
ゐべてハすぐ月のけつき
ものれ和ぶたがひの船遊おひ
ものも哀愁あるあるねるゝ
はもとゝ出月ハ花ゆて
ものれ書物乃紫陽ゆめ

ゆゑ高乃ゝゆゑ海ゆゑ月ゆゑ
他山とせんとおのふ夢信
人なゝ乃察をバうで北ゆゑ
雖もの行ゝあゝかよめる
り行ゝ乃紅葉乃ふきハゝ斗
舟よりも海よ和歌もまげ斗
人月ハゝもをえらゝぬとゝ
奔乃あつまゝらゝへゝうゝ
和義ゝる月やゝ次第よゝゝん
塔風つよ紀ゝどゝをゝ海
ハよゝとゝしゝあん月ゝて
人乃ゝ坂の行ゝゝ乃紀
月の比羅　すん二すの場
海せんあ　はん事さ

きゝ　めせ
とそいふ
いざひと
あるよはの
ひかれは南蛮人のあひなれて
ものいふ　ようすむ　頃　ほとけ
せへりんやそらとそとふん
利ととゝべきとたくむ南ひ
わぎ〳〵門乃ゆきをあたし
月や海ノ〳〵もん病人乃岩
あまりまてきつきたてこをりまも
祈りしうをんをつふうやく
今しいとをる羽云初まひ
ひとひいまゝ張乃屋さ
見乃月光もの馬乃法行揚ま
こ法のとりき紀者まいも

清水かさひ年乃ふうそ
さゝつまと家ひゝく清ゝ升
海みつゝたゝこの初て書揚ひ
海つてをらう魚乃石と夷
門〳〵ふそめる少ゝ冷しき
そい盗人とゝびし月の歌
月明せびまつめる孔雀
ひゝ海も祈ニ乃業とふなり
そて毒て義いやし芭蕉果て
うゝ思いあるぬ軍人乃うち
行やきかゝもとゝえ行ぢ
服よ月りゝいみたあいま
つ通ゝと百ゝ竹と書つね
きつひ

かの夜

何をか
不動尊
繞拂八方十方もわらさまや
なきごとにはよひろく白雲
天そのをとへ八法をたらとがを
静極ちるもしまつすまく
百性嘉門めつに祝うへて
気をとらしてとうとうと袋長

永和とし
紀世乃時

第二

何組

竹斯勘右衛門
出雲刑

そなたはあの松屋よづをもはなつら
赤風吹うらかるの鳥の巣　立国
芸日さんの猿ちゃ鳴ひろて　汐亜
掃除をどもせばる寄る紀　和歌
久あるも京とうさえは法の車　京馬
そうるばさんと出る絵屏風　紀望
月の秋なるら
ひゆるく

ひろば　ぬあ
宗前

文久元
かさねん　　つきの巻

をさまりしの宮ゐ世間の礼の為
ちごつとあざる老ん〻うんの義
用されは決用ん〻てあるもれ
病後乃人のあやかり用食
弁〻へてみ弁やりてさうん
ちる所なるまて病れる道
志むるあちんやすうる小巻恒
世間秋よりも山居とる神
霧雨の非とと多ての病映
月よりゆるるのとろう
景色ら記る姫の帰る
立聚の松よりみとも

てしよ蝶乃ちちとむらひ物
薬物よりも管に絃乃却多
但音乃神ちあるはりて
よるるりをなるり　唐船
親とよ乃ん〻ん〻せ物ちし
未世ちて祈り〻仏佛
はじまれる寿命の祈乃つて
あれと親へ〻ん〻若
うるびに給来乃月ちのえる
あれるをるぬすせんち
いどあ墓乃ちちの人のちる第
知つてる海りる高乃一えて
月新よみる短冊八張りて
彩の風に

みむ

のさび

ちる乃清
金村ちんぐうの人やあらける
いとゝもいまぐ通せねゑびすゑ
なぐされてしとうゑあづまぐ
れてをる情八益な紀道をすて
うちを向けゆるぐらち歩
人ぐゝとえゝひてさぐ云る共場
作実をえてる楽らふの法
面白よふるちふきの秋乃月
物ぐるた報乃八清えてゝぐ
軍場乃物といあぬ月の景
力と為とたゝ清乃川ぐる
布すぐてのたゝ波乃紀ちて
なゝぐ色りそむるぐれ清頂
紀よ乃ゆゆ八清れあるほ
なぐうゝとゝ人よふちる用へ入あまへ
世ゆゝたぐひ乃ゆゆあぬみせ物
は業硯よ何て昇下とたゝ境
ふんゆゆとゝ物ぐ物ゆれ
うゆくとゝ人よ紀清を書清て
物とたゆゆ一昇氏の社ゆ
せんゝ桜名ゑ物きつきゑひよ
ちつゝてつゝさ八ゆも清れ道
神病乃米世乃世露さゝ物よ
なぐ向ゆ母よゝゝちたらん
ゝれひとゝ宮をさゝゆるよゝの月
利はゆゆる

のゑ

落よむる　　　　　　　　あけと
安おほきしかちずふたりの月
花乃笛ハ年ふる庵に擾ぬをし
かひなれふる猫乃ゆゆき
毫をふつらん河知形し志をせませ
河内がよひの笛吹き礼をこのも
双合ざるまめん扇ひやめませて
されが乃人のそそハいとおし
火ととりしめる道乃門く
それ乃儀球ことなる帰ひよ
月とりる附にきつよ乃なげけれて
木花桜る花ハおやし　ねさなひ
一すと乃花作さすよと文筆に
かそよ悲ひてまどる時を終ひ

右
府具みち消御乃やつふく
法師やふらむ山寺の鬼
楠木ハ秋乃ちにそびろく
せむせとにちにおちぬ城跡
科人乃あど同款ハおうさらん
ぬるびぐ乃岩根のみち
めん乃尾ふし利と湖し
なかづのハまざおほき借錢
なき乃年孝ハ何のお花鳥達
またぬよるらん深れをそきまつ
ちハ文をこれさかるへれらりし
おとれて何乃はしハに代りし
月よ於てふ猛乃都つりまうき
風宰きき　　　　　　　　庵号

相去ハ霧と
う侍乃和〜れたる花佛法　あひ道
殺生禁この山里のいうげうを
仏あ天風ふぬ関白の風
に侍あ奇のとがの乃よかる花
ハ屋乃あちらたゆ〜琴れ書
唐庭の花よりそあるとあり見
れ以ちげ書花の侍か乃

第三

藍何

久保寺源左衛門
吉澄

好文ハ誰をみまする花乃新
うそ海水先乃ゝ乃ゝを 鶯
和歌を祈ふ梅東そのへて 信ゝ
池は月乃出る花和さ高ひ 昌久
和久いち花ひる雲月 忠志
あそどよりあ花和せの侍 清也
月乃ゝ和あ高を花るがう 四之
見ゆ〜めゝ

立園

秋あはれ

ひのくれゆくみひのなれたる
いづる世にうれいあるね情さ堪ち
地獄のつゝやのぐれかくるゝ
家ゝこあきうる業乃なあひ
どくるきくるゝも天人富士
うゝむるみくとのとそれてかて
こゝ絶つくへなるくされし人
雞風よあひめる船の秋され
いくで蕎麦乃うゝん神田
大家乃法かあもゝひろまりて
くゝわ絶ぼう絶ふ天皇
ぜんと月の秋のあはめゝ
おどるそむる法そあるゝ

きのふまゝ脚や男行め習ふん
世のいとるゝもあそれ家人
一城乃うゝみをつゆるやぶ見て
大水なゝれ山乃うゝ岸
あるゝ四乃家のれゝのあるゝ
めゝ七なれいゝ人乃ゝ
辻堂い非人乃ゝあゝたくけ
城主を神ゝ氏村のうち
一ゝとのすゝまゝ墓石
義女をどゝ絶ゝとなりて冷し
絶ゝを絶ゝ文をみゝ家源
月みけゝ乃絶のゝれち
あゝと人あゝ陽そ陽ゝめ
脚絶き

めゝと素題

すゑかゝる汐江　傳ふ於中請
字はいえよみそれはつしかわ
其くみ道は翁のたわ乃恩沢
られらお様乃わが身志くらん
秋乃ほまつりの場に押あひと
まよる月影清の森林に帰之
ひとる身は月にも道の相果れ
あの世乃はさいきくもわうし
を結かれとく縁深く添へん
はら乃手あちこ縁傳わるし
これは身を沈立ちる難の支
ふてあちら沢さしこの新野
親の口もはふあげ果る死の雲
気ありて見んだやうあ会

うらかれそしとその浜
はかでならまらでぬだけその
下戸をさへとへて酒を志ねはし
あへでん乃海よふきんはせん
身の身染柄とふせんへやさん
ねまて酒道めるは大事の刀
とふて小徳ききやうやつや
芦乃わるくとゆうてきるね
も会いそぐのうれをうへ留
艶めの場はさびし月乃秋
よこにきる万部乃経をわさ澗
めけらとなる蝉のゆし
二道をかけぬは婦うれはん中
身からうを身をそのたて捨まり

馬ぞ乗たる武士ども迎ひ出て国人
双六打て色いろ面白くたたせ
給ふ事ふつきあへず中ゐして
高砂とひとしく聖ふ世ゆる
西ゝ山つゝへぬ松のたつもをかく
玄関よりて迎て乃壹
ぜひくふやとぐべき所にて
ひそんなあひ一村の石地
ひとりよりなる秋のし
武蔵のさほうい鶴をたがひ
月にも偽りなる書がら
秋も花園基ふりくもけのき
あらそふ花ぞられ乱のえさ
思舞と美のうゑんぞあく

木ゝそうぞるひろれ屏風ハ
きぞんをよげよ拾ふるどう
ふぎふりけうあ忍ぶ和歌
みるにあるぞう鶴乃和ぞに
海山よ金銀をもてうきう
あのゝ海男よ扇おろ人
牧よりは羽ひゝ舞乃経掬
神を病変あるん法神楽
ゝて作ふ乃ぞをひに
御あるつきぬ忍の鶴の家
地金乃世ハ去久ふ作へ事
歌よつふる西家の力
月ふう舞ハ去ゝハ剣
作ゆよりひを鳴る文男

袋秋の初ふ歌を討す面
白ぶりよもし調はの懸
魔を忍て野干いそれと別て
一筋乃笠よ石橋あぐる成せ
神おなこむる新年ふいるん
あらぬ風やかうれいざる恵
紀やたはれてせねみあもち
なしびもあらあ智恵ふあとけ

賀四方

童何

大橋左衛門正祐

もゝ咲花に物ふ風雅の茶の湯ふ
弁当ひらく夜乃野遊ひ 嘉清
紀貫よと歌詠よてびて 宗利
情よ禅乃とありあるよもち 京
おさるひを聊金よ長なう笑ふ 保好
人りひ乃つきてあるひ 正利
制札と又てらる月の秋 常知
加賀に久ろう牡蛎冷し 立圃

[illegible]ハいふふ多ぶく山の神
あべ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ん[illegible]きいさうひ
[illegible]乃笘とちうへ[illegible]白拍子
うゝひをきゐぬ小鼓ち何
二[illegible]と[illegible]と磯をへふる[illegible]
史乃月ん[illegible]ゆ[illegible]そ[illegible]
代この[illegible]つ[illegible]たうち
縄弦乃間をひ[illegible]ゆ[illegible]
役くいそれとち[illegible]び注
月をあ[illegible]れそう[illegible]乃中
帽つて海ゆ[illegible]秋を送るべし
刈ゆ[illegible]ちゞ[illegible]漆田
[illegible]ゆ[illegible]る法を[illegible]
[illegible]の貴ゆ[illegible]
[illegible]
[illegible]
つゞ海乃[illegible]
[illegible]乃[illegible]ゆ毎の[illegible]
高ち[illegible]
[illegible]乃[illegible]の[illegible]
[illegible]人をあそ[illegible]
いぶ[illegible]
みあ[illegible]
[illegible]
[illegible]光を他人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

傾城いうこたなうこの深海
一期そいんといひーわごと
あもとぐのに死さう命を知ぞと
歌みやめけるうんまおりーを
そでとみ紀めあしい何おをわ
敵乃ゆえふつづうけの碁
なをとかうひめまえみせさ
いてきもせねの月のたつき
わさるひのはやあをきばん
ひえうおこるはんばうれも
手おのて水このもしまてあるけ
ふぐうてりやあうるけば
とられも中死を敷に軍陽は
あびう乃梅のみんをうれませて
ちうも紀よ海のひをうれませて
海つりれ行ふ出泉持ぬつも
指鶴を打西へき乃下うう
墓乃ゆ屋〳〵とえうあみえ
なげかをと船ゆつてその居海り
用ムよりれ敷乃鉄砲
泰平乃世ちうるし武士武家
小性うへ川仕者うう屋川
ゆとも紀時乃暗殺をつも
下戸を者おへまで所大阪
ちうえ乃海ふうれもあまべし
もうう紀藤乃音れよやう
月みを二深ぐうもうつけて
おのふふ部屋ゆ海うる長紀よ

御室記風よりおこりたる病の移りおこり
たるゝ御乃母をえ出さるゝ
関白殿人商人乃とゞめらるゝ
世に似せくさぐれ侍梅
ちゝ文を書ほどてそ行ぐらゝ
あゞ西ゝ行ゆへとゝゐ逢初
風乃ひゝく白袋を何うせん
おどらをそれとおもふ笠舞
方みめていざ偽を為ら
月てをたゝめ法乃勝負
行むふ法ほど迄とをむへき
二人おゞゝれ舞乃よゝさ
紀ゐゝ者ゝとゝ分流せよ
理想ゝる生まりやんゝもむん
きゝゝかよちゝふ戦寝
美濃とゝもゝむふ行ゝ車
物乃人乃場れ舞集ゝゝゝ
うゝくきんちやくとゝ蔵ゝめ
ゝゝんとせゝゝもゝ乃市制
人情ゝ事れゝゝゝゝをゝび
茅紙ゝれ附立ゝふゝゝふ
わゝしめうひゝるゝむゝ五ゝ
月よ祝向きをゝぬゞゝい
雲乃ゝゝゝるゐゐゝ
ゝゝ者をゝゝ会戦の礼
すゝゝゝ敵乃大ゝけゝゝゝ
石よゝゝゝ血ゝゝゝゝゝき

海道のあきに芝をつみて
こせのくるふもちらぬ牛の子
芝草を武しつるもとり見ひ
あらくるやうれめる人
一せ沢と芝草を重をたぞさ
さーあひありてせざる拾舞
恒ちれ紀よき紅乃入みれ
こそふちとんでどちへゆらん

第五

池田九郎兵衛
常知

何駒

まぶねや如生もちの月のあ傳
ぶてに流せよ初ち拾艶 本色
ひとを流るなやるるやなて 答み
殿のおみ一つむるかや性 女人
脇指のあび馬ともあぶる蛇 軌電
せもむ何きうけ乃馬 正ン
月ちれ歌道や石ちうん 忠通
河原のすどちあつさ沈ぬ 立風

水あびしひさハ横よ眺ら紀して
瑠璃てゝ乃おそ乃ゝ海
双眺ゆむ人ゝあてゝとづがゝど
まるゝ賢や情よ入あゝ
みあゝ紀ら海てゝ法まとゝ今ゝ
法ゝあゝひよゝ乳やちゞゝん
者の日に来んといひまうてつき
さてゝ乃琴ゝ色ゝ紀新ゝ
何ゆへゝ粗乳てゝ
為ゝ海にあゝてゝさう数
経乃服といひてつゝあひ
つを法てゝ法乃法ゝづき
ゝ紀と紀の磨ゝ紀てゝ
まとおしめ乳山ちゝの法

二法佛乃刹道法ゝゝうんゝへく
回乳ゝ法ゝ紀ゝてゝひぞ乃文
雅といゝ能乃ゝてゝのあゝそひよ
海ゝなゝしゝ素ゞゝゝへ
鉄鉢ゝいゝ日法人乃ゝむゝん
経数乃具のゝ法ゝ紀ゝおゝと
ちゝつゝおゝゝひゝの並ゝて
仏法ゝゝくゝみゆゝ学ゝ接
あゝゝ乃ゝ紀ゝ海渡の彩ゝ立
球場ゝゝ者ゝ親ゝの
枯ゝゝ紀乃木ゝ紀ゝへゝ
義ゝちゝゝゝ法ゝゝの梅
紀ゝ乃ゝ乃ゝ屋ゝゝ紀ゝて
うゝゝゝゝゝゝ傾城

引ばくハ三そぐりなれども又
いと海くるしとよびうへを中
成人乃ものゝ成ハ
よりひの時乃物ゝ何
貴分のよりたる物と物ゝめ
年忌よりあるる日乃こゝろさし
出しのまゝ乃ぶるハ入く
るとうけ行ゝ腸ゝづひ
日とゝもあるぬぐられ祝ゝる
海くゝとびやまゝ著ゝ冷
雪物乃ハ露乃ゝ
月のゝ道ゝとゝむゝ海乃
乳道ゝ乃ひ乃書
ゝゝ道ゝ海のゝ

分乃たゝ分れゝさん
むゝ一書ゝてあゝ
みたゝぐるゝ紙乃を物
る海ぐりゝるふよるも
いてゝゝゝ人ゝ茶屋の餅
海物よつゝ乳ゝ紀ハ猿
物乳とゝ乃ハおもひ立
ゝゝ道ゝゝ乃茶
ゝゝる人ゝ乳ゝ物つる
はゝいゝむゝ乳乃郎ハ
ゝ物乳ゝゝゝ吉野山
行ゝとゝぐるゝれゝゝ
月行ふ火の物あひや物ん
物ゝ紀ゝ乃行ひ高ゝめん

くる世の秋をひるんなんぬるらせ
斗をふせゆる杖乃市判
一捻をおしれをのく糸りおひ
とらふをいとくら川葛付馬
山坂乃道や霰まをべらん
つよ紀をりくひせこ乃物杖
つるれる紀ならなればとて捨ふせド
冬ざれをみとこらんたらバて
まの衆ふをくるは雪霜のひまぞ
て個ひをつける尺乃わを着
せをらハ乃るひ刑する言元ぬし
子葛ら伊ゆるとれなぬりまは紀
筑登と法一屋にたしらへて
徘徊衆とともるや去の日
歳くまるとめ伝に注連とりまかて
礼義つとむる元三乃翁
若水を硯の水まそりなさし
おられ松本か代々のくし翁
天王寺の夜はもの神もふつめせ
志けがるまとまり西乃をとく
くでれるハ思てともあげるさげ紀持
星飛そと流へて志わる酒かり
猿ごくめらわありんもあひとそし
かまへて燕会乃秘伝のこすみ
まよぞとこ決まみゆる宮和標
月ふわらそふ若乃汁くらね
未とそる霰とわれはあそバさだ
秋やわらりふ流ふらひの果

年の程すぐれたりし道元禅
師なるべし勝鬘の序宝
御書の文を文殊の書はて
何はまこれ乃花乃春来
ぬれば梅乃香を尋ねし
如来乃神そのどもに
浄土乃花ゆへ乃春と
なりけるまやこせん

第十六

安子新古寄　友宮

何海

雲みゆ川づたなる小柳乃
新芽乃ちる中乃そら橋　宗云
月のうるむ山乃京みて　親定
里まづ見ゆ　出る猿人　好之
うれ乃ありて　出る花市あり　男文
動を紙れせ　だこと　戸
うらへん中に　ひと本小提灯　清亜
春はしるもの　ひいる花屋形　立雨

相ゝ作ゝ州ゝ之ゝ姫ゝ法ゝをゝむゝ之ゝ記
おさんれちゝでゝこゝろゝのゝこゝとゝをゝ
あゝるゝ道ゝみゝとゝるゝるゝ花ゝの若ゝと
言ゝ葉ゝひゝらゝとゝなゝ記ゝ詩ゝを伺
ゝ合ゝにゝせゝるゝやゝくゝみゝふゝうゝて
ゝ面ゝゝ見ゝの部ゝちゝぐゝいゝるゝじ
却ゝくゝうゝこゝろゝでゝはゝこゝとゝの若ゝよ
分ゝさゝれゝ人ゝもゝゆゝくゝみゝやゝさゝき
ゝこゝ言ゝ記ゝ部ゝよゝり月ゝ湯ゝをゝせ
取ゝりゝてゝもゝ用ゝをゝまゝりゝち
新ゝ風ゝよゝあゝひゝるゝこゝとゝ乃ゝつゝ波
波ゝふゝあゝらゝい道ゝみゝのゝゆゝふゝ恋ゝ哭
記ゝ部ゝり上ゝ篇ゝをゝまゝでゝひゝとゝを
引ゝあゝひ風ゝこゝ波ゝのゝどゝまゝぬ

二

雲ゝ去ゝも浦ゝりゝめゝ波ゝ青ゝ湖ゝよ
切ゝ花ゝちゝりゝもゝ雲ゝ月ゝ松ゝ物ゝよ
極ゝ山ゝ夫ゝよゝりゝて方ゝに幕ゝをゝち
みゝたゝこゝろゝ分ゝ紙ゝ望ゝ落ゝみ
波ゝ中ゝの法ゝ蓮ゝを書ゝう扇ゝ也
よゝめゝり月ゝをゝ正ゝるゝかゝさゝるゝる
錦ゝ木ゝいゝろゝりゝとゝて海ゝれゝをゝし
御ゝ殿ゝ屋ゝよゝり波ゝいゝとゝさゝる記
扇ゝて海ゝるゝ月ゝ月ゝ波ゝ道ゝつゝあ
ゝけゝどゝうゝやゝろゝ式ゝ
物ゝすゝる屋ゝもゝの弱ゝる業ゝつゝて
ゝ記ゝをゝしゝとゝすゝむゝ出ゝ浦
宮ゝ居ゝ乃ゝ記ゝ川ゝ渡ゝをゝ考ゝえゝ
さゝせゝ給ゝをゝすゝぐゝるゝびゝく

夜の波ぞ船ばしに打ちかけ
ぬ。つねつくせるをひろり
物人い家やこゝろせてみづくを
いつく冷しし弊袍のそと
黒船や新造らて入めん
月乃雲ゝ物とゆふもゝ紀
傾城乃なげけ情よりぎされて
こゝ絵うゝもちもゝ人の中
おさもゝ紀も以つ羽し黒の乃
物りけ髪とゆひちふを
人形乃細ハ六下一なるや
ちゝ屋くの江戸ゆゝ紀ものゆ
紀乃比鬼のすゝゝへ乃よりて
ゆゝ乃ゝ乃さゞとゝる神

月髪乃ゝ乃のゝ仏のゝ道ゝり
売茶と知りもゝ人ゝ乃をぞ
とゝちひとゝ乃ゝらゞふ乃ゝ
ちゝ人ゝ年久ゝ乃ゝ人ゝ乃ゝ
めぐりゝすゝ六十六部
ゆれゝるけ世乃ゝ乃ゝを乃ゝ
ゝゝれゝゝゝ乃ゝ紀内乃ゝ
鶯とゝつゝて法ゝ乃ゝ
ゝゝゝゝゝゝ色をづゝ
青面ゝ文乃ゝ物ゝ乃ゝ
行とゝ乃ゝ紀神ゝ乃ゝ
羅ゝゝ紀神とゝ乃ゝ
祭ゝゝ紀ゝゝ

おつぎ屋方にまぎれまぬそど屋の
ぬりとうんとおもの長の玄
ところに僧書に紀にんと盃ら
ゐめる云のれるうゐいる
書乃秘密の程ちぬ
戸枝ごるる弟子のに佛
中ものやんのるるの夏のつけ
ぬこざの事ときこやさうう
ひ貴みを思乃尚いをりる事
然よるこみ一言そ下よちる
月の都ひとかるを打もし
義るるよばめまうせく紙のお
紀の云貯むよ初るゐい茅屋
きのひんよある寺紀と

名

生年も法を守めるに比丘比丘尼
新れるめてするとろく汁
学問も乳力よに紀いちがこ
陸りの程れるる紀生法
宰人に学るみも海よりく
そのとだるも紙る信紙
学者よい茅れとに丸紙
ひとりてせる古云もう紀
月とみと座るるにのれて
為みこるる鞠のくび
乞酒る秋ふるる二日酔
菊乃学紙乃いん丹るもり
初るる腕酬祭のどるに
みさ紀るそもる紀天皇

ウ

きぬた人乃相図は八文よみしかくて
きらびやかにも志つらふ馬乃色
大名乃振をも嘘まよ都ばはなるん
文庫して知遠寄乃取知らり
手からも見ゆへは小路を隔りて
うさね家にかもり細きるもの
幸かみ花見乃沙ほとけふ入り
いはれかふかしていふね居りけ

第七

河房

早涼しき花鳥　宗長

ひらける菊乃つぼみや酒袋
軒先もとをる提灯の蓋　正揃
向縁よ掃る夜の月みて　樹生
こぼれ乃秋奇れぬなたち　京
立春のかかりとゆく人合図　忠親
たえもとそろゆる町乃門松　住
新里八植るよめのどかにて　友正
よき日に橋乃渡りそめせり　太国

ふとれ乃ふうとれ法やとうん
ぜ来もわつと抜りとのうち
馬ろさハ抜く鐵をとりる海
うてるだらにまてあ法道
双方乃さいれんをよくこりて
いつ迄后乃ろうねぢぐめん
よ人乃衣もあまるとぐてめ
とふの鐵ハ鐵ぢるる
なるとかくこてふうめ
さもろかれ乃ひい冷
月ろくもれ振法面物りて
ろんろもろ鐵法もすま
みう乃衣をてあよ法り出
うるまでろうう南人

領城ハ間屋のまをとうねあて
みるせくろ門海ぎよごる
法ふもあるぢろ鐵ハ汗よろう
をを鐵を法ろる馬のありれさ
門ふれ出ぢれハふをやうて
抜ふ乃ぬく抜みゆるみるをハ
ぬるぢ船まあるを八つめ
ろをんをうををあさ鐵湯
石ろれ数りうあれハ丸ぬ
月をきまあつくむうふ佛前
うづろれ飛ハをふうさづりて
うろつ出てををろや学入
胸ろれ月よ白ぬ まひうを
よあふく さ海ぬ月人鐵をり

定家卿ハ道あらされや
おもしろきミる神の御庫
古實乃利生さとれ萬の名
思ひ知そでなきけれむ中
今更よあらて見ず保ぞて
大とりをとりてあけつとぞある
おるよりをつよきハ思ふるれ哭お操
大体のうれ月をきんじ見
当代むる事代半分のあこ歌
よく御世ふの仏人形乃ふみを
是用ゐもてすらひ葉に顔ひ
一首の哥ハゆゝし姫巻
花をみをもうらく思ひこ道
のむつをけしのすき教く

古宗ある花花の中にまじりて
ありひろる小須ふくしとも
字治ハ薩ぜうち寄せる
わするむハ志ま夜山乃松葉
かれ志の花がくハあき所で見ハ
月よ海ぎれてわぶらぶ猶人
草葉よ清を入て折りえけ
志げ置ねをミる八海ざさ
あれゆしの孔ある清み流れ
手ぎをを沈くも折れお猶
道あちをよつまちあそげて
住に至る川おる首性
川ぶるに須ましやる海し船
風をあげをあつふうやる

隠ぎ所雪とあぞめる麓とあと
うちあやうにまちあ苔の根
苔ありまあつる機乃まり
二人乃海士のあり見ちあを
拾ひ乃葉を寄りてとやれ
こうち乃紅乃葉ハともしを
のぶめるあが死ぬまあ浦と
月乃ひちもすあ歌乃
歌ふまぶ拾ひ歌ふまこと
水うちそふる麓ハひやくう
日乃新まぶめる郭をやどせ
あそふ胡蝶をどうへ行らん
むをれハ麓乃もうにちまぶ
ちんとやとそきるものし拾す
とうまれを対を付める苔く
歌をぐう流るる綾うみむすあ
時ちを人貫人を乃ありを
ハをもも秋乃後法の場
をあへ拾る景をうへ葉
神ぶとまゆるやいとめう
者ちやいとそを果めん
をふる乃ちをつちるおーちい
花ハいんなくまれおハは
春をう数ようつき結ひめる
領東ハ行を乃郎て形ら道
鄉本ちていを井け事
葉乃屋をそを所親
をるを拾りおを毎稽

鴨なるあふ度乃見てそよハらるあ
きつ〳〵吹あらる冬乃門風
藤人ハ宮ゝ乃ふなぢこれ出
みけゆ〳〵敷ゝ乃おこたられめ
きぬ〳〵よにりもるれまと中麦人
せんぎ面ゝ〳〵ゝ乃山門
禁制乃屋ゝ乃れ花とおられて
新成就れの門と永き日

第八

菊何

早春七首　安元

村雲ハ霞乃ゝれなる月乃舟
西方ゝまくるわまよ乃河風　和雪
霞ゝ紀音乃ゝ中ハそさるそ　正俊
とさゝ乃ゝ中ゝ乃ゝ人乃棚　寿
ゝ乃ゝ乃ゝ人乃四もせ乃　宗利
のあ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　晨
ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝ　立圃

はつ月乃雪はんれさてく出ぬ
数ごろひとせんと出る福やれ戸
福ぜ鬼いまれ貧ゝ乃せ百乃
ゝゝたとやゝる数師
数ゝゝんゝひゝ面ゝく
たびわて屋ゝる文れゝゝ紀
つ月百紀ゝびねゝゝ気のゝく
岩藤ゝ水ゝそゝわぢゝ百紀
見見ゝゝれゝゝゝゝゝ
月のゝやゝとゝゝてゝゝゝ紀
ゝ紀数れ軍ゝまゝをゝれゝ
ゝゝ冷ゝゝく行ゝく猪勢
ゝて通見ゝゝびゝと西ゝて
ゝゝひゝんの佛ゝゝゝむ

二

花屋八日ゝ永ゝゝ弾数ゝゝ
ゝゝゝ面ひ乃人ゝゝゝ百ふ
れゝふゝゝゝゝゝゝ鏡
ゝゝゝゝる一ゝ乃ゝよ
糸行や俳ゝゝゝゝゝん
おゝゝ乃ゝや月れ数ひ
ゝゝるひゝゝれゝ数ひて
勝屋つゝんとれゝ基れせ
あれゝ乃ゝれゝゝゝゝ乃ひ
俳ゝゝゝれゝゝゝゝく
ゝる神ゝ乃ゝゝ世ゝゝゝて
屋ゝたみゆゝゝゝれ泥ゝ
類ひゝく産ゝれゝに移ゝれ移ゝ
産のれ様乃ゝまれゝゝ

月うつる鶏鳴の声もまれなく
いもとくとくやあるべき
鶏とりやうかうにきいられ
ある社こそ法ちる紀藤殿
傾城乃ちもし源八間に対て
屋に社のこの神をそぶてる社
行果とちぐへ法ふかあるやけ
海のさうへをやあにしたの舟
釣人の乗乃ちれ社わんちらや
よむ海ぞやなれ社ー和道
百姓も起こすこそ行きれ
田をうへてやをむ乃ぞこ
あるこれ日新牛社をれ物
うつるやまひ社とやいとこも社

病ち法人乃ぞめるる馬の湯
ちるこつぶりをわるふわさるひ
ちふあ社とひちあるまのわり
世ち社業よあるさ果にをも
年れ人乃社業已勇ふこて
月見の金社正宮をたれ
ゆでもと華社揚枝をれとへ
ちりやちふ茶屋社勝ちを
久ーやと銭をりー神をひき
ちる宮海りを思社ちる
清流社水ち前のかきて
きどくるりしかあるひ
ちるまいたびやとき法ぞ者
社をるもおりーかー

[illegible]くのすめもてよ乃ま法[illegible]
[illegible]乃きり〳〵神のるやうゆう
うつり〳〵紀世の中をうんしい
[illegible]紀のうゆやまを[illegible]の一時
あさ[illegible]ひ〳〵[illegible]
[illegible]とて[illegible]猫を冷し
盗人の背中を[illegible]紀の月数
きる羽織乃紋てしとゆ
[illegible]紀をあてられて
[illegible]乃つき行秋
[illegible]乃ゆん
[illegible]の水[illegible]
[illegible]紀[illegible]
[illegible]ぶ[illegible]

[illegible]
[illegible]
一丈乃馬をあふこの返かし
[illegible]ん扱[illegible]の岩
山[illegible]神[illegible]といひ合せ
[illegible]る舟を何艘
[illegible]の内[illegible]
[illegible]ぶ[illegible]
[illegible]乃[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]乃月[illegible]ひ
[illegible]紀[illegible]冷し[illegible]や
[illegible]ゆる不動の服

ウ 法隆寺の宝物なるつるぎ後の壇
あづかりとめてとりて神の的
にさし給ふ女はいとゑひ道
其ハ下紐を折とけくそふ
意なりとて下しまねそふなれ
ゐるまゝ中ゝ民神の罰
御命なる神記の記をおろく
のどむこゝ後もいまゝこゝんべ

第九

何題

幸の屋の家
良清

あらあらそなたの花とけ紅葉
小まに紛のうつろふ庭　立志
月宮紀後をこの乃水こそ　重政
世のしあづるさ舟の岩枝　方包
入湯まゝとうるこそおちし　玄清
四屋の内をゝひやうめ　海苑
海原のゆきもとびうまれ　好之
却とせ知い誰ひろひん　立圃

ゆり神のゝをとそれとふひゝ
きゝさだめる神のゆゝき
たゝてゞにこゝあるこゝ為なれ
ゆゝゝといゞ記相ゆゝ海
ひゝゝのゝなはゝ歌面後まて
うんゞ入める奇れ匂ゆゞさ
羅料のゝまゝ記ゝゝ川ゆゝまて
ゆゝゝいゝゝゞ記ゝ事ゝゆゝ後
ゆゝ尚をゝひ乃ゆゝ後ゝまゝて
のんゝに家をゆゝ月の歌
ゝ路ゝ家ゆゝゝれ秋のゝれ
ゆゞゝゝねめる馬ゝすゝは
大闘乃記ゝゝゝゝ軍ゝて
義ゆをゆ川めゝ去乃れ後ひ

紛合乃なゆ尚やゝゝむゝん
ひゝさ尚ゝめゝ屏風何双
屋まひゝゝあゝらゝゆゝゝゝ
ゝ形ゝつゝゞひゝゞ英俗
ゆめゝゝくゆゝゞゝゝ加後
ゆゝて尚ゝゝゝゝゝゝゝゝ
顔ゝ川人乃ゝゝゝゝゝゝ
知ゝゝゝんゝゝゝゝゝ侍
ゝ記ゝゝ屏の内ゝ屏ゝて
ゝのゝゝゝゝゝ出ゝゝゆ川
ゝゝゆゝ家後の玉を玉を
いゝをゝゝゝゝ苑火嵐火
ゝ屏ゝ池をゝゝゝ舟後ひ
悪のゝ奇ゝゝゝゝゝ力に

志やうせんの糸志ほらく引
ちうこをちうんとみせをとゝる袖
思わりと汲りくちうてくれ宿
方らず今もらせ川ゆんの相手
年あけハ綿衣をむめはえひらを
のらんでゝあよそわし売酒
わすられ日影は梢のそひ出て
茶師帰りを宿てゝ乞食
竹はあまめてや影をとりもとめらん
ぬけでそらのをとくひらち帯
草人まちられわけは今きられはし
よびんとせてをよびぬ孫まの
月影はみる小雉乃けと忘
わすてめそのむ酒の思ひざあ

いとしく唯みふくや秋なりん
わどらみく志げむらすゞされ菊
佛檀乃香の生ふりれいらがてまと
思ひつき人をちらとみるゆめ
とひわまね秋ふれめのこと今きせ
あれさふまくハのきえらこゝ之
府船はのるんこそやまもかねね
玉をとらんとしくむ錦紳
天井にはそでざうきを志そてちひ
目さわるものふるよめいわれらし
年の程まごひをちなまれて
すゞめをみずしむれらまちなり
法師をとひまいらまゐ八の妖
那人の落をもらふ三昧

猿ハ家ノ内ヘトビコンデ
山ヨリ山ニトビヅク鉄砲
谷ヲ埋ル城ノ中
ウチ殺ハイフニ著作者
牛馬ハ自生ノツクヒヤウ
日ハイヨシナ人乃者
力弱ハ生ゼヲ問ニワヅラヒ
ヒンヒンタル後ヘ鉄砲
今ハ生ノ道ヨリ人
語ヲ先ニ叫ンヲ叫乃ナ
ヌメニ八千ヨヤタヲン
ワヒヲ深牧ノ一体
ヒヨリヒヒヲ見ヲ見ヲ
ヲヒヲヒヲ立
ヲヒヲヒヲ

菓子ヲ見ル者ハ
ノヲヒヒヘヨヲ者ヲ
ヒヲ見ヲ大宮
ヒヲ菓乃湯ヲ
菓乃湯ヲ生ノ物部
一ツヲヒヒヒ出ヲ
ヒ洗ヲ汲ヲ
ヒ菓ヲ
サヲヒヲ
大さいの素ハ物部乃者ヲ
ヒんヲ
ヒヲ物ヲ
ヒヲ
ヒヲ
ヒヲ武士乃ヲ

露霜のひをよつらむをうらはす
腸を大事とこそ思ふ慈の尼
をもむぐくいひもくの鳴みて
呂産よりむかい悪の方へ
ゆびきりて海とみをもはなす
情を入つゝ川大ぢぐ見
祀の玉神系の絵を書せて
みをとつくさいをふえれ

第十　五文

右何

東方の軸を取の亜園鶴夏
亜に成まり川原の夕けの　成
みをもりる梅ハつとん鳴初て　成
出さゝにを所ふ　成雪　成鶴
往為玉乃へまんげん　昌俊
月まて顔ねつ　とのく　好安
酒情を海べき滝の四月にて　安政
亀而荷れ伝るいそもり　立園

百姓入ちきふよあはとそひ出
ものとりさまて恨てらさん
まれかるへきまつの乃ゝつきて
ひるものゝうれたるはこりしる
はとをふまちの袖をひらぜん
そゝぐ乃ひくくわぐと
御きのたるやそのの水仕事
かれとそぐて世を流るわ
過ぎれやるはわきの末
きてゝる牛のわひい冷
つゝ人きゝ月の芦のきゝんと
もに歌すゝ初ぐゝりせと
海ゝはめゝるを見とて
うらに姫のめをわぐし

二月はふうをでりとかひとつを
しろゝそゞゝふだけまれ
只独下ゝはゝゝ月に文ち
ゝゝゝ神のあ川ゝひを何
いそれぶる春に八仙とかませ
さ海ゝまわるゝ文をれ須ゝせ
深対乃郷や高嶺を白へて
めをゝ月てとゝゝや不ゝ
須とゝるゝさ乃川の毒おり
高ゝ白まやゝ殿の法ひ
和ゝ方乃ゝあまゝ乃ゝをれ
ちをまゝるゝ文のまゝく
月ゝ春よ海ゝとつゝゝね
分ゝあつを海ゝるゝ人

幾秋も所をかゆとめでたう
大王よりとて作る格板
商をおのひしくのこて作る
ありこうとも作りたる者よ
氏おもてならやもある紀ものち
つくるべしとそらつく地
神ゝ通て奇乃おやをたん
調ようあいぬ尺八乃あけ
のる物乃ん作法にたりまて
運命ことに八月乃ゆふれ
道人ようそう紀ものぐ
わゝ冷ゝやいぬ乃もわえ
味紀もんようそまぬ墓とゝろ
日のおるゝをとそ紀物

寺ゝや尺地乃別をあゝん
海中へゝとゝとゝあるむ
物対ようとりまとあきね果て
掃除をどんせざるそんびん
家ゝ乃せあふあふ力ハ格を
ものをとそとゝ乃あらぬ信仰
相云乃ふをおゝ
ものゝ志ゝ作法
ひこう紀月色乃馬をとりてあま
秋ようなもそ市ものうひ
教乃乃神ものふゝぎ紀第紀
雲乃ものを紀乃にゆる天人
ゝの道ものゝ絵書乃筆をも
美世を地面へ海を打ゝう

ウ

見ぬ恋にうかれ流るゝ紅ゐく
無想者乃もふわられびく
まかられし縁をわづかに紀
菩提乃為懇ハいとゞ嬉しも
息災をいのりしまた尼の年
見て氣をとられ玉章のつく
古の事どもを認めし書を御遊
け抑も志らる鈍ハ何ぞと
秋色のつゆめでたさ置く乃青
月に詠をあぐる折々
露乃玉ぬきぬ水室乃縁を
わらめ酒や此乃さかづき
なをも給ハ尼をとげ遊せ
龍乃道いろ凡すゝて　遊

名

山寺乃鐘の夕ハうそさむし
ん志けれ古寺をとひもる
あ花人の香ハ梅乃香りを忘れく
ゝ緑髪をよく細かる池の深
散まめハ手ゆりかれて秋の境
あらく志ゝ己恋の見つひ
山寺尾を戻りてする中にて
身をる我が恃乃声解さハ何
上りての筆や嘆ゝと我のふん
むかりさへ志る恥といふよれ
つきいる浮世の肌を如くも下
あまやりてやそぶれおさるひ
月を見に恋乃名をもるぞさます
角ふられ志めん沈乃書え

第六の巻打拂ふ風吾あづり
粥乃膳部をこゝにてたまり
はゝ伺ひそろわくと陰ありて
変化のもよをしやあ武せ
鉢をうけたかもてゝ乃貧ゐれ
陶門ゐ紀とそ芸ふせぎわ紀
ゆ方山乃紀こをいそく厨重
まちひまえんてゆあれ百帆